

鹿児島県立与論高等学校

校長通信

第5号(令和6年10月18日/校長 大倉秀心)



校訓「好学 創造 親和 不屈」

鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地1



電話 (0997) 97-2064

FAX (0997) 97-2844



デジタルからアナログへ バーチャルからリアルへ

50メートル走をお互いにタブレットで録画し、10メートルごとの通過タイムを入力して速度を計測し、自身の速度変化をグラフにして確認する。グループごとに課題点を分析して、次の改善練習に臨む。

これは陸上競技を選択した生徒の体育の授業の一コマです。「科学 (Science)」「技術 (Technology)」「工学 (Engineering)」「芸術・リベラルアーツ (Art)」「数学 (Mathematics)」の5つの分野を総合的に学ぶSTEAM教育の一端を垣間見ることができます。生徒は一流選手と自分のデータや動画を比較しながら、地面を力強くキックしたり前傾姿勢を維持したりすることの必要性を理論と実践を通して学んでいきます。

2016年に内閣府はこれから目指すべき未来社会の姿としてSociety5.0を提唱しています。Society5.0とは「サイバー空間 (仮想空間) とフィジカル空間 (現実空間) を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」のことを指します。こうした時代を生き抜いていくためには、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながら統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質能力が必要となります。このような力を身につけるためには、STEAM教育が有効であることから、日本でも推奨されるようになりました。本校では教科の学習だけでなく、部活動でも一人一台端末を活用したSTEAM教育的アプローチを推進していきます。



では、これからの学びは端末一台で完結するのか。この問いに対しては、まだ「Yes」とは言えないと私は思います。ツールとして「必要な場面において」端末を利用することはいいとしても、様々な情報を計算したり覚えたり、導き出した結論を言葉で相手に伝わりやす

く表現したりするためには、圧倒的な「座学力」、「脳に汗をかく」というアナログ的な姿勢が求められることは、年度当初から伝えている通りです。学びの主体であり成長すべきは端末ではなく、生身の人間である君たち自身なのです。これを忘れてはいけません。

ちょっと古い情報になりますが、京都大学の鎌田浩毅教授がある教育雑誌のインタビューで、「アナログ思考」がこれから重要になってくるということを以下のように語っていたので参考にしてください。

20年前の学生に比べ、今の学生は受身になっている。ネットが普及して便利になり、情報が溢れていることが原因だ。昔は聞きたいことがあれば先生の研究室に直接会いに行ったり、図書館で調べ物をするときは、コピー機もなかったので、手で書き写していた。今は聞きたいことはメールで返事がもらえるし、図書館に行かなくても、多くの情報はネットで調べてコピー＆ペーストで手に入る。便利になった分、学生が動かなくなった。それにより、情報を苦勞して得る本当の面白さや、人に会う意外さがなくなってしまった。

例えば、紙の辞書を引くと、隣りに面白いことが書いてあって、それを読み込むことで知識を豊かにできる。しかし、ネットではこのような偶然の面白さが無い。必要な部分をピンポイントでコピーしたら終わり。そういう意味でネットは自分たちの世界を狭めている。

私が高校生や大学生に伝えたいことは、ネットがもたらす世界を変革する「アナログ思考」だ。ネットの世界はバーチャルだが、それに対して、リアルに体を動かすことが大事で、学校に行く、サッカーで汗を流す、友達や先生と直接話をする、隙間時間に紙の本を開いて読む、などという「リアルの世界」を意識してもらいたい。効率化一辺倒ではいけない。黙っていても効率が良くなっていくので、逆の方向を狙うのだ。バーチャルな体験はいつでもどこでもできるが、高校時代にしかできないリアルな体験をして欲しい。

ノートの取り方にしても、大学生の中にはパソコンで取る人もいるが、少なくとも高校生の間は手で書いた方がよい。ノートに手で書き、本にも書き込むことで脳は活性化する。教科書も紙がいい。いずれ小学校から順番に電子教科書が導入されると思うが、今の

生徒は、紙の教科書で育ったということを逆手にとりて誇りにして欲しい。(『学研進学情報』2015年8月号 抜粋・要約)

結局、ツールを使って学習は終わりではなく、ツールを使った後のアナログ思考・アナログ行動が大事ということです。将棋の藤井聡太棋士は練習にAIを使うそうですが、使えばなしではなく、使用後もそうとう「脳に汗をかいて」いることは容易に想像できます。

君たちはどう生きるか

10月15日(火)、島内15事業所にご来校いただき、「島のしごとフェア2024」を実施しました。様々な業種のお話を伺えたことは生徒の皆さんの視野を広げることに役立ったはずです。それぞれの事業所の業務内容の詳細は初めて聞くことばかりで、驚きも多かったようです。感想文には「島から世界へ」「ないものは作ればいい」「どんな生き方をしたいかが大切」等、キーワードがいくつか見られました。各職場で島民の皆さんが自分の仕事に誇りを持ち、島を愛する気持ちにあふれていることが伝わったようです。皆さんもこの気持ちを大切にしてください。ご協力を頂いた事業所の皆様には深く感謝申し上げます。

「どんな生き方をしたいか」と「どんな職業に就くか」は深く結びついていると思います。与論島関連の郷土本の中に出てくるエピソードで、私の心に残ったものを紹介します。

ある日与論の中心街、茶花地区の海岸に、6人くらいの小学生が遊びに行った。そこには森やお墓があって、お墓のそばには粗末な小屋があった。この小屋には心を病んでしまった人が隔離されていて、子どもたちにとってはからかいの的になっていた。今から100年以上も前のことで、当時は与論に病院もなく、心の病が知られることもなく、対処することもできていなかった。心ない言葉を浴びせながら竹で小屋の住人をつつくというような酷いことも行われていたという。

満足な水や食料も与えられていなかったのか、住人が「お水をちょうだい」と、泣きながら少年たちにせがんだ。少年たちは立ちすくんで何もできなかった。一人の少年を除いて。

その少年は走って10分くらいの距離にある井戸の水をゲットウの葉に包んで運び、住人に与え、乞われるままに数回それを繰り返した。

すると潤った住人は天に向かって両手を合わせ、こう言った。

「どうか、この子を偉い人にしてください。シマモチ、クニモチにしてください。この子を成功させて、この島をいい島にしてください」

「シマモチ」「クニモチ」とは、島や国を持つような人、島や国にとって重要な人という意味。この少年が後に海運で奄美群島をつなぎ、そこに住む人たちにたくさんの恩恵をもたらすことになる。(山 悦子『与論島の山さん』 抜粋・要約)

この少年が、大島運輸(現在のマルエーフェリー)の創業者、有村グループの会長を務められた有村治峯(ありむら はるみね)さんなのです。喉が渇いた人に迷わず水を与えたように、損得勘定なしに、無私の心で、奄美群島の人々のために役立つことに身を捧げました。この話は「どんな生き方をするか」「どんな職業に就くか」を皆さんが考える際に大きなヒントになるのではないのでしょうか。

有村さんは晩年、「私の今日を築いた源は『三つのおかげ』。一つは学歴がなかったこと、二番目は貧乏だったこと、三番目は両親からもらった丈夫な体」と語っています。

「学歴がなかったおかげ」で、他人の話をよく聞き自分なりに世の中の動きを勉強するようになった。「貧乏だったおかげ」で、どんなに苦しい時でも辛抱し耐え抜くことを覚え、お金やものの価値が分かるようになった。「学歴がなく、貧乏」というマイナス要因を、「両親からもらった丈夫な体」でプラスに転じています。自分の不遇を周りのせいにする風潮が強い世の中になりましたが、成功する人は運で成功するのではないということを理解できる言葉だと思います。

有村さんは若者に次のようなメッセージも残しています。

「これからの社会は予想以上に変化するだろうが、人の真似をする人に将来はない。人のやらないこと、気付かないことを、先手先手と進まなくてはいかん。明日から先のことが大切。誰でも無限の可能性を持っているのだから」「脳髓使って時代に立ち向かう気構えが必要だ。」(実島隆三『南海の海運王 有村治峯の足跡』 抜粋・要約)

有村さんの「脳髓使え」は、私の「脳に汗をかけ」と真意は一緒です。時代が変化しても、生きていくのに必要な力は変わらないということです。

※『与論島の山さん』『南海の海運王 有村治峯の足跡』 どちらも本校図書室にあります。是非読んで先人たちの知恵を学んでください。